研究ノート

山岳観光の社会史
—「立山・黒部アルペンルートの旅」を通して—

東　　美晴

はじめに

ある場所がなぜ観光地でありえるのか，それは「観光のまなざし」によって支えられるからである[1)]。立山・黒部アルペンルートは，端的には山岳の景観を美しいものとみなすロマン主義的まなざしに支えられ成立する日本有数の山岳観光地である。しかも，ケーブルカー，バス，ロープウェイ，トンネルを通るトロリーバスを駆使したルートを建設することによって，誰でもが3,000m級の山岳に親しむことができるという大衆性が付加されている。しかしながら，この大衆山岳観光を支えるロマン主義的な山岳観・自然観は明治期に移入されたひとつのまなざしに過ぎない。立山・黒部にはいくつものまなざしが投影されてきた。たとえば，明治以前，立山は三大霊山の一つに数えられる巡礼の地であった。この文脈における立山は，日本の伝統的な旅のまなざしの対象である。同様に，明治期以前の黒部川流域は黒部奥山と呼ばれる，人が踏み込むことを拒否する原始の，禁忌の地であった。これも日本の伝統的山岳観に根ざした一つのまなざしである。また，黒部観光の中心となる黒部ダムは，その建設を巡る物語が昭和の神話として語られるものであり，戦後を象徴する場所としての意味が付与されている。さらに言えば，近代的ロマン主義的な山岳観も高度経済成長を経ることによって変容している。近代の技術力によって征服し，観賞することを可能となった場所は，現在では世界的な環境観の変化の影響を受け，保護され保存されるべき貴重な場所へとその位相を移している。

言い換えれば，立山・黒部は，日本人にとっての伝統の，近代の象徴の一つであるとともに，全体が山岳に対する伝統から近代，そして現代に至るまなざしを照射されてきた場所なのである。

実際，立山・黒部の観光においては，様々なまなざしに支えられたいくつもの物語の

断片がその案内の言説を形作っている。それは，立山山上の見所に立てられた案内看板，ケーブルカーやロープウェイの中での饒舌なアナウンス，おびただしいパンフレットやガイドブックに，脈絡なく開示されている。こうして見ると，現在の観光地は，一つのまなざしに集約されるものではなく，交錯する複数のまなざしの上に人々を集めていることがわかる。そこにおいて観光客は，自らのまなざしと一致する，気に入った物語の断片を，旅の記憶として持ち帰るのであろう。

本稿は，立山・黒部をめぐる多重に絡み合う物語を解きほぐし，交錯する観光のまなざしの解読を試みるものである。同時に，これは一つの観光案内の試みであるとともに，日本における山岳観光の社会史を立山・黒部に集約し浮かび上がらせようとする試みである。

1. 立山地獄めぐり

現在の富山側からの立山へのアクセスルートは富山地方電鉄立山線による。立山線には，終点立山に至る途中に，岩峅寺（いわくらじ）という駅がある。岩峅寺は，富士山，白山とともに日本三大霊山に数えられる立山への入山拠点であり，江戸期には立山宗徒の宿坊の村であった。また，かつての立山徒拝では，常願寺川沿いに，岩峅寺，芦峅寺を経由し，材木坂から弥陀ヶ原に至るルートが一つのコースとなっており，岩峅寺に続く芦峅寺（あしくらじ）は立山への登り口となる村であった（高瀬，1977b：p.186）。芦峅寺は美女平へ至るケーブルカーのルートもその区域に含んでおり，現在においても最も立山山上に近い集落と言えるだろう。

岩峅寺，芦峅寺はともに江戸期にはすでに宗教村落として自治組織が作られており，両村に住む御師たちの勧進活動を通して立山信仰は全国に広められてきた（高瀬，1977b：p.196）。両村落とも加賀藩の支配下にあり，加賀藩では山廻り役を設置し他藩との往来を禁止していたが，両村落の講が立山徒拝を禁止されることはなかった（高瀬，1977b：pp.187－188）。この意味で，両村落は立山信仰とともに成立していた村であった。

なお，かつて芦峅寺の全ての御師が佐伯姓を名乗っていた（高瀬，1977b：p.187）。明治以降も芦峅寺の佐伯姓から立山・黒部登山の案内人を多く排出しており，彼らの子孫の中には現在に至って立山山中で山小屋の経営に携わっている者も少なくない[2]。

立山信仰の中心は地獄信仰である。高瀬は「いまも地獄谷の名で呼ばれる荒寥とした谷間には，轟音をともなう噴火の現象が見られるが，これこそが日本国中の亡霊がおち込む地獄であると信じられたのである」と記述する（高瀬，1977b：p.184）。この立山地獄の信仰は平安の末頃には，ほぼ形が整えられたという[3]。現代のアルペンルートでは，ケーブルカーにて立山から美女平，高原バスにて美女平から弥陀ヶ原，天狗平を経由して室堂へと至ることになる。現在のこのルートは，かつての立山地獄を巡る禅定徒

拝のルートと重なり合っている。

現在，標高477mの立山駅から標高977mの美女平までは，ケーブルカーは7分で登る。この標高差500mの坂が材木坂である。かつて材木坂の登り口にあたる鷲の岩屋に女人堂が建てられ，その先には女人禁制の結界として材木が積まれていたが，それが結界を犯した娘たちのために，一夜にして石と化したという。また，美女平には美女杉と呼ばれる杉がある。この美女杉は，結界を犯し登った娘の化身したものと伝えられている[4]。現在，我々は男女の別なく標高差500mの女人禁制の結界をやすやすとケーブルカーで越えていく。ちなみに，立山で女人禁制が解かれたのは明治5年であった。

美女平から室堂までは高原バスとなる。その途中弥陀ヶ原は1,930mに位置する高原である。木道が延々と続く泥炭湿原であり，初夏には高山植物に彩られるひろやかな美しい場所である。ここには高層湿地に特有の池塘が多く点在する。これらの池塘は「餓鬼道地獄に陥った亡者が作った田」とされ，餓鬼田と呼ばれてきた[5]。いよいよ立山地獄の始まりである。なお，この周辺では，獅子ヶ鼻岩がかつての修験道の行場であり，付近に役行者窟，弘法窟など石像を祀った岩窟が残されている[6]。

標高2,450mの室堂平は立山地獄の中心である。室堂の名は，江戸中期に立てられた日本最古の山小屋（もちろん立山信仰のための）に由来する。室堂平には石仏群や供養塔が残るとともに，みくりが池，血の池，地獄谷（鍛冶屋・紺屋・百姓・無間・団子屋など136の地獄を含むとされる）など，地獄と信仰されてきた景色が広がる。なお，現在，室堂へは美女平から高原バスで50分の行程だが，かつての立山徒拝では早朝4時頃に芦峅寺を出立し午後3時前後に到着したという。

立山地獄は，現在の我々にとっては，立山の火山活動が作り出す景観でしかない。だが，江戸期までの人々にとっては，「生身のこの身このまま生きた眼で，死せる我が最愛有縁の人々に遭うことのできるのは，越中立山に如くはなし」であった（佐伯，1977：p.272）。地獄谷の硫黄の煙の中に亡くなった父の幻を探す，谷底の血のように赤黒い池に亡くなった娘が立ちつくしていないかと思う場所だったのである。

明治26年に立山に登頂したイギリス人，ウォルター・ウエストンは地獄谷の様子を次のように示している。

「日本にたくさんある有名な硫気孔の中で，一番注目すべきものは，室堂の北八〇〇メートルの谷間にあるもので，そこへ達するには，この小屋の近くにある二つの緑色をした山の池のあいだに通じる道を行けばよい。その上の小さな丘の天辺から見ると，その谷間じゅうに硫黄と泥が沸き立ち泡だって生き生きしている。これを大地獄と名付けているのを見ると，この地方の人びとがここをどんなふうに考えているのかがよく分かる。…丘の上から谷底へおりて行くには，蜂の巣のような土の上を歩くのだが，それには非常な注意がいる。硫黄の小さな円い丘は非常に熱く，不注意に一歩でも踏み誤れば，

下に隠れている沸き立つ液体の中に落ちてしまう。硫黄と白い岩との混合物からできた小さい丘の側面の割れ目からは，蒸気と硫化水素が，耳をつんざくような響きを立てて噴き出し，固い硫黄の沈殿物の塊を四，五メートルふきとばしている。二，三の硫黄の池からは，暗緑色または黄色の熱湯が四，五メートルも高くほとばしり，下へ落ちたかと思うと，また同じような激しさで，噴き上がってくる。こうした池のいくつかはその温度がほとんと九三度だった」(Weston，1896：pp.163－164＝147－148)

現在も地獄谷周辺には「長時間立ち止まらないこと」「遊歩道をそれないこと」など多くの注意書きがあるが，散策ルートが現在ほど整備されていなかった時代には相当に凄まじい場所であったことが想像できる。また，現在，地獄谷を源泉とするみくりが池温泉（吹き出す硫黄が谷を伝い落ちる水と混ざり源泉となる。地中から湧き出す温泉ではなく，目の前で作られる温泉である）は，日本における最も高所にある温泉とされている。その温泉に嬉々として浸る我々は，生身のまま地獄の釜で茹でられる愚かな亡者といったところだろうか。

室堂は立山の3,000メートルの峯々，雄山，大汝山，浄土山，別山，剣山（伝承では礼拝すべき山であり，人の登攀出来ない山であることが強調されてきた）などへの登り口でもある。立山の地獄を巡り，玉殿岩屋，虚空蔵岩屋など参詣すべき場所を参詣した翌日は，早朝に出立し雄山の峯神社を目指す。そこで阿弥陀如来の姿として御来迎（朝日）を拝むのである。阿弥陀如来が救済のシンボルであることは詳述する必要もないだろう。なお，この立山禅定徒拝の仕上げ行程は，富山県地方では男子の成人への通過儀礼として制度化されていた[7]。

補足として，立山が日本三名山の一つとされたのは橘南渓の『名山論』(1798) によることを付加しておく。これに先立ち，梅田久英は立山の雷鳥を描いている (1788)。また，『名山論』から6年後の1804年に谷文晁の立山を含む「日本名山図絵」が出されている（高瀬，1977a：pp.557－558)。このように江戸中期には，立山は単に禅定徒拝の対象であったばかりでなく，文人墨客を中心に，その風景が鑑賞される場所にもなっていたのである。このことは，18世紀末には宗教的まなざしとは異なる新たな山岳に対するまなざしが生まれていたことも意味している[8]。

2. 黒四まで

アルペン・ルートは室堂から雄山の山体を貫通する立山トンネルをトロリーバスで通り抜け，裏側の大観峰（標高2,316m）へ至る。大観峰からは立山ロープウェイにて標高1,828mの黒部平へ，黒部平からはケーブルカーにて1,455mの黒部湖，1,470mの黒部ダムへと至る。さらに黒部ダムの背後には針ノ木岳（2,821m)，鹿島槍ヶ岳（2,889m)，

五龍岳（2,814m）などが連なる後立山連峰が聳える。この後立山連峰を貫通するトンネルをケーブルカーにて通り抜けると長野県の扇沢へ出る。ここが富山側から入った場合の，アルペンルートの終点となる。

ここでは，立山から黒四に至る空間，立山信仰から黒四が作られるまでの時代，この二つの軸を交錯させながら章を構成していく。

（1）黒部奥山

通称黒四・黒部川第四発電所と黒部ダムが作られた黒部川は立山連峰と後立山連峰の間を縫って流れる峡谷である。この黒部川流域の広大な山域は，黒部奥山と呼ばれてきた。幾百もの峰が重なり「八千八谷」と呼ばれる谷を形作る黒部奥山は，怪異や不思議に満ちた深山幽谷として文人たちに記録され，民衆からは踏み込めば祟りをもたらす神秘境として畏怖されてきた[9]。その一つとして，奥山の木を伐採すれば天候不順となり，凶作がもたらされるという禁伐伝承がある。この禁伐伝承は，天保9年に行われた加賀藩による奥山伐木事業を頓挫させている。この事業では，6月だというのに吹雪に襲われるなどの天候不順に悩まされ，その寒さと重労働によって病気による落伍者が続発したのである。禁忌伝承の通りの事柄の発生に怯えた民衆の反対によって，この事業はまもなく中止されたという[10]。このように，黒部奥山は民衆の素朴な信仰において，踏み込んではならない禁域とされてきた場所である。

しかしながら，この黒部奥山へ踏み込む者がなかったわけではない。その一方は信州の山民である。信州の山民は領域を越え，黒部奥山のネズの木の盗伐を行った。もう一方は，加賀藩の「奥山廻り」とされた人々である。加賀藩ではこの一帯を軍事上の天然の外濠とみなし，幕府に対しては人跡未踏の地と報告し続けていた。しかし，内部的には「奥山廻り」によって詳細な調査を行うとともに，信州側からの盗伐や隠密の越境の取締を行ってきたのである（木本，1992：pp.43－50）。また，岩峅寺，芦峅寺の御師たちも，黒部奥山から信州へ抜けるルートを知っていた。戦国期に，富山城主佐々成政は豊臣秀吉に攻められた際，立山を越え黒部奥山を抜けて徳川家康に助力を乞うた。その際に，芦峅寺の御師が先導したとされている（佐伯，1977：p.275）。

江戸期までの，立山から黒部ダムに至る空間，黒部奥山は，以上のように禁忌と秘密に満ちた場であった。

（2）明治・大正期の黒部奥山

立山信仰，黒部奥山の神秘の霧が晴れるのは，明治に入ってからである。立山信仰は，明治政府の神仏分離令によって大きな影響を受ける。これによって，岩峅寺宗徒，芦峅寺宗徒による全国での立山徒拝の勧進，芦峅寺の立山仲宮で行われていた布橋大灌頂等の儀礼が途切れる。また，立山の女人禁制が解禁され，加賀藩による黒部奥山への入山

禁止も解かれる。

その後，ウイリアム・ガウランド，ウォルター・ウエストン等，イギリス人による立山周辺の山岳への登山が始まる[11]。ガウランドは大阪造幣寮に冶金技師として勤務していたイギリス人であるが，明治10年に外国人として槍ケ岳に初登頂している。日本滞在期間中に，乗鞍，立山にも登頂している。なお，ガウランドは日本アルプスの命名者である（田畑，2001：p.275）。ウォルター・ウエストンは日本における近代登山の父とされる人物であり，日本アルプスの世界への紹介者である。ウエストンは立山へは，明治26（1893）年，大正4（1915）年の2回の登山を行っている（田畑，2001：p.4）。

いわば，明治期に日本に滞在していたイギリス人によって，立山にもアルピニズムが持ち込まれ，宗教とは切り離されたスポーツ登山が始まるのである。なお，当時は案内人と人夫を連れての登山が一般的であった。案内人や人夫には地元の猟師などがあたっていたが，彼らの禁域とされる黒部奥山への恐怖心はそう簡単に消えるものではなかった。針ノ木峠は長野側から黒部川流域へ入る一つのルートであるが，1893年にこのルートを走破したウエストンは次のような記述を残している。

「八月七日の月曜日の晴れ渡った朝，針ノ木峠，つまり「赤楊（ハンノキ）の峠」を越すために，二人の猟師といっしょに出発した。前夜は宿の主人の助けで，その二人の猟師を雇い入れる約束をしたのだった。もっとも，このために大町の西の小さい部落で，近隣の猟師の溜まり場になっている野口へ，この二人が来てくれるようにと人をやらなければならなかった。しかしながら，ほかの事情もからんでであるが，彼らが遅れて―午前六時に来ないで八時に―来たということから，彼らがこの遠征に乗り気でないのではないかと，かなり私は疑った。なぜなら，事実，針ノ木峠は長い間危険だといういやな評判があったからである。二十年ほど前にこの峠が初めて開かれるまでは，日本海の南八十キロにわたって，信州と越中の国の間には実際何の交通手段もなかったのである。峠路が開かれて後―　お粗末なものだったが―数年の間，サートウ，チェイムバレン，アトキンスンおよびほかの人々を含む外人旅行者の五，六パーティが，たいした困難に出会わないで，この峠を横断した。しかしながらまもなく，われわれが時の歯と呼ぶいろいろの破壊力が表れ始めた。つまり，雪崩，地辷り，それに加えて秋の豪雨が，まもなくその峠路をまったくわからなくなるまでに破壊した。そして針ノ木峠は，その昔の姿の残骸を留めるにすぎなくなった。この峠は，実用に使うことはまもなくあきらめられた。そして今は―実際，ほとんど埋没されて―死の状態にあって，その墓誌にはすでに消え失せた峠と書かれていたのである。…荒れた急流は籠側であり，私たちのルートはその川の水源まで右岸か左岸に時には凹凸の多い川床に上に沿っている。こんもりとした林は，両岸の行く手を遮る丘陵をおおっている。前面の方遙かに大きな岩の障壁がそびえ立ち，その雪におおわれた峡谷はもう目の前に浮かび出てくる。その谷間に近づ

くほど，私の仲間たちはますますその峡谷がいやなようである。彼らはこの探検が可能かどうか疑わしいと言い出した。…」(Weston，1896：pp.150－154＝129－131)

このように，江戸期には禁域である黒部奥山，そして黒部渓谷へ踏み込むことのなかった猟師たちも，外国人旅行者の案内人として恐る恐るその暗黒の森へ踏み込んでいったのである。

なお，宗教と切り離された登山としての，日本人の立山登頂は明治27(1894)年の参謀本部陸地測量部の舘潔彦に始まる。登るべき山でないとされてきた剱岳も，明治40(1907)年に，参謀本部陸地測量部の柴崎芳太郎によって初登頂される。また，立山山域でのスポーツ登山の先駆けは，明治42(1907)年吉田孫四郎である（鈴木，2000：p.154)。こうして，明治末から大正期にかけて，日本人登山家によっても剣岳や黒部奥山への登山が試みられるようになり，その幻想が剥がされていくのである。たとえば，大正10年から黒部峡谷一帯の走破を試みて来た冠松二郎は次のように記している。

「岩魚を釣るとか猟をする為に，黒部川へたびたび入っていた人達は，下流では越中音澤村，愛本村，折立村等の者で，殊に音澤村の助七などはその最も古い一人である。平附近は主に信州大町の者で，品右衛門とその息子の平八郎が最も古く，そしてこの附近の地理を詳しく知っていたのである。越中立山村の芦峅や，大山村の小見，和田の者は木挽とか，ヘギを造るために，越中澤（ヌクイ谷)，木挽澤附近に小屋を営んでいたので，その入っていた範囲も，殆ど同じ区域に限られている有様であった。これ等の人達の中で，大山村の者が，最近に於いて特に黒部川についてよく知るようになったのは，自賛ではないが，私等のような『谷狂（タニキチ)』が入り始めてからのことである。実際，立山群峰に就いてあれ程精通している宇治長治郎でさえ，立山の東面や黒部川の流域については，それまでほとんどまとまった知識を持っていなかったのである」(冠，1928：pp.51－52)

この記述からは，自分たち登山家（ここでは「タニキチ」）が未知の領域を明らかにしていくパイオニアであるという自負が読みとれる。また，次の記述は，冠松二郎が昭和14年に黒部峡谷下の廊下の完全遡上を果たした時，そのエピソードとして同伴した人夫・安川の言葉を記したものである。

「安川は調子にのって語り出した。『黒部川黒部川って，子供の時から話ばかり聞いていたが，とうとう誰も来ないその廊下へ来てしまった。黒部の奥には大きな孟宗竹があって，その皮が年々剥がれては下流へ流れ来る。まだその源まで遡って，その竹を見たものはないと云うことを聞かされていた。来てみればそんな孟宗竹などありはしない。然

しいなあ』と小供のように喜んでいた」（冠，1928：p.186）

ここでは人夫たちもすでにウエストンの時代のように暗黒の黒部奥山を怖れていない。登山家とともにその領域を明らかにしていく喜びに溢れているのである。

（3）黒部奥山と電源開発

幻想が剥がされた黒部奥山には，鉱物資源や水資源が見いだされていく。日本電力，東信電気，古河合名会社などの測量部は冠松二郎等初期の登山家と並行する形で黒部奥山に入山し，ルートを築いていく。それらは日電歩道，東信歩道等の名称で呼ばれ，比較的安全に黒部奥山を歩くための重要な路となっていく[12]。これらの路は，特に黒部川の電源開発において重要な役割を果たしていった。実際，黒部川は日本有数の豪雪地帯にあり，3,000mの高所からわずか100kmで河口に達しており，水量・勾配ともに電源として申し分なかったのである。この項では，黒四へ至る電源開発の歩みに触れておく。

最初に電源としての黒部川に注目したのは金沢出身の化学者・高峰譲吉であった。高峰譲吉はアルミニウムを国産するために必要な電力を得るために，発電所を作ろうと思い立つ。だが，神通川水系等ほとんどの川の水利権は他の電力会社に買い取られており，急峻なため開発が難しい黒部川だけが残っていたという。高峰は黒部川の調査を進め，大正9年には上流の水利権を手に入れるが，大正11年に没する。この後，黒部川の水利権は日本電力に譲渡される（木本，1992：pp.122－123）。

ダムの建設による電源開発は，荒々しく峻厳な自然への挑戦と征服の記録として記述される。その論法に乗って記述していくと，黒部川水系の最初の発電所は柳河原発電所である。大正13年に建設に着手されたこの発電所が黒一ということになる。この発電所は宇奈月温泉の上流2kmほどのところにあり，いよいよ険しくなり始める黒部峡谷のほぼ入り口に位置している。黒二のダムはその上流である小屋平に，昭和5年に完成する。だが発電所そのものの完成は，世界大恐慌のあおりを受けた不況によって延期され，昭和11年になる。黒三は戦争を支える電力を供給するために無理をおして作られた発電所である。そのため，欅平（標高600m）－仙人谷（860m）間，わずか6.2kmの間にある260mの比高差を利用するという，当時では前代未聞の勾配を持つ発電所となった。また，この仙人ダムと発電所の建設はいよいよ黒部奥山に踏み込むことでもあった。結果，深山での凄惨を極める建設風景が展開した。長大な温泉脈が側を走るため百数十度にもなる高熱の岩盤地帯にトンネルを掘り軌道の敷設を行う。耐熱服などなく，抗夫たちはただ冷水をかぶり掘り進め，ダイナマイトを仕掛ける。だが，そのダイナマイトが熱によって点火しないうちに爆発し，数え切れないほどの犠牲者を出す。堅牢に作った筈の飯場が冬営中の大きな雪崩により，一時に70人，80人の死者を出す。そういった雪崩も一回ではなく，度々起こる。あまりにも過酷な労働環境に日本人労働者が集まらな

くなり，日本人外の労働者が強制的に狩り出される[13]。こうした悲劇と犠牲の上に，黒三は昭和15年に完成した（木本，1992：pp.124－138）。

なお，黒三までの建設の過程において輸送手段として宇奈月－欅平間に敷設された専用鉄道は，現在，黒部峡谷鉄道株式会社によって経営され，黒部峡谷探訪のトロッコ電車として観光客に親しまれている[14]。

3. 黒四

（1）黒部ダム建設の物語

黒部ダム建設工事は昭和30年に着工を迎える。この工事の完成ははしばしば昭和の神話と形容される。それは，人跡未踏とも云うべきの黒部奥山のただ中に，後立山の山中を長野県の信濃大町側からトンネルを穿つことによって，当時世界第4位の巨大アーチ型ダムの建設が行われたからである。莫大な経費と労力を投入して行われた難工事は，人による大自然の完全なる制覇であり，この制覇が昭和の経済成長を支える日本人の精神と重なり合う。実際，この工事はそれまでは度々呼ばれていたアメリカ人技師を呼ぶことなく，日本において培われてきた技術によって行われたものであり，日本の土木建設技術が世界水準に達したことを確認させるものでもあった。

なお，この節は木本正次の『黒部の太陽』の記述を参照しながらまとめていく。『黒部の太陽』は黒部ダムの竣工から日が浅い昭和39年に毎日新聞に連載された小説である。黒四の「紙碑」とすることを意図し，工事関係者にたんねんなインタビューを行い，実名で書かれたものである。そのため，小説ではあるが比較的正確に工事の経過がわかるとともに，当時の工事関係者の意識も汲み取ることができるものである。

ところで，人跡未踏の黒部峡谷とはいっても，実際にはダム建設現場に近づくルートはあった。一つは，黒部川左岸の日電歩道である。黒部川を遡るこの道は，断崖を縫って岩に彫りつけた幅30cm程度の桟道をつないだ道であり，前述した電源調査時代に作られてきたものである。転落すれば何百メートルか下の黒部川の急流に飲み込まれ，助かる見込みのない道でもある。もう一つは，一の越を通って立山を越える山岳ルートである。それにしても，黒部川を挟んだ後立山川には直接アクセスできなかった。日電桟道は，黒部がいかに危険な場所かを示すものとして，現在も黒部トンネルのケーブル駅にその写真が残されており，歩荷（ボッカ）の人力で立山越えによって初期の工事資材を運び込んだその労苦は後年の『プロジェクトX』に取り上げられている[15]。

黒部ダム建設において最も注目された工事は，ダム建設現場へ至るメインルートとなる大町ルート，すなわち大町トンネルの建設であった。大町トンネルの建設は，小説『黒部の太陽』においてもクライマックスである。小説『黒部の太陽』は，当時関西電力の建設事務所次長であった芳賀公介が黒部入りするシーンから始まる。そして，順次，人

跡未踏の地・黒部，工事全体の概要，工事の困難さなどが描かれていく。厳しい越冬，いざという時に十分逃げ場がない自然条件に起因する決して安全とは言えない工事環境は，この工事全体で171人の殉難者を出す。だがそれは黒三までの前近代的で，非民主的に管理され，工事が強行される中で，作り出された地獄ではない。小説中ではいかに人命が尊重されていたかが，何度も強調されている。手元に記録はないが，実際，黒三までの工事における殉難者数と比べると，171名でも，人跡未踏に近い山中の工事としては，少ない方とみなされたのであろう。そして，クライマックスは大町トンネル掘削中に突き当たった破砕帯である。破砕帯とは，簡単には断層の形成に付随して岩石が圧砕現象を起こした部分である。この部分には当然，大量の地下水が含まれており，掘り進むことはできない。関西電力が社運を賭けた工事の中核となる大町トンネル建設が，この破砕帯によってストップする。工事の挫折と関西電力の倒産（あまりにも巨額を投入した工事であり，一私企業である関西電力は耐えられない）さえ，ささやかれる。だが，あらゆる可能性を検討し，前向きに努力し続けることによって破砕帯の突破がかない，大町トンネルは完成する。こうして建設ルートが確保され，昭和38年黒部ダムは完成へと至る。

大町トンネル建設の破砕帯突破をクライマックスとした黒部ダム建設の物語は，日本アルプスの大自然に挑んだ日本男児の勝利の神話であり，171人の殉難者はこの闘いの英霊へと格上げされるのである。

だがこれは黒部奥山の終焉でもあった。昭和34（1959）年に黒部を再訪した77歳の冠松二郎はその旅を「私は丁度よい機会に黒部に入ることができた。私は黒部へ，さようならを言いに言ったような気がした。これは恐らく原始的な黒部への最後の挨拶だからだ」と記述している（冠，1979：p.289）。また，ダム完成後の黒部について「この大工事のために，下ノ廊下及び中流の原始的美観が失われることは事実である。それに代わって，十数キロにわたる山上湖が出現し，その山湖を中心として，立山，後立山を含む一大山岳観光地が出現することが想像される。私はどちらも率直に認めるものである。そして出来得る限り黒部の原始的自然を保持し，俗悪の施設を極力避けらるるよう深く希望するものである」と記していることを付加しておく（冠，1979：p.116）。

なお，現在，黒部ダムのレストハウスでは，やはり破砕帯の突破を中心としたダム建設の短い記録映画が上映されている。そして，記録映画の宣伝として「あの『黒部の太陽』ような」という言葉が付加されていた。石原裕次郎主演の映画『黒部の太陽』（昭和43年）が，いかに黒部ダム建設の神話化に力を発揮したかがうかがわれる。また，大町トンネルのダム側の入り口には，破砕帯の水が引かれており，観光客がのどを潤している。

(2) メディアとノスタルジー

完成から40年後，現在の黒部ダムに触れておく。

1959年に冠が記述した通り，立山・黒部は一大山岳観光地となった。冠の予想とは異なり，黒部ダムのにぎわいに比べ，黒部湖周辺は取り立てて大きな施設もなく比較的静かである。

立山・黒部アルペンルートの中で，黒部ダムは相変わらず最も重要な観光ポイントである。だが，もっと正確に言うならば，それはダムの堰堤と，大町トンネル中の黒部駅までの過程だろう。すなわち，ダムの堰堤は俳優・織田裕二が映画『ホワイトアウト』において歩いた場所であり，トンネルは2002年末の紅白歌合戦において中島みゆきが『地上の星』を歌った場所である。

21世紀に入り，昭和の神話・黒部ダムは遙かな過去として回顧される。しかもそれは，映画・テレビというメディアを通して行われたのである。

その現象の一つは，2000年に織田裕二，松島菜々子主演の映画『ホワイトアウト』（原作：真保裕一，1995年）が公開されたことである。映画の舞台は架空の，日本最大のダム，奥遠和である。奥遠和は貯水量・電力供給量においても日本最大のダムであるが，爆破されればその下流域20万戸を水没させる物騒なものでもある。映画のストーリーは，奥遠和を占拠したテロ組織が政府に，20万戸100万人の命と引き替えに50億を要求するというものである[16]。

映画『ホワイトアウト』において興味深いのはダムの位相の変化である。大雪に閉ざされる山中の巨大ダム，奥遠和は明らかに黒部を下敷きに構成されたものであり，実際，映画の撮影は黒部において行われている。しかし，1950年代から60年代にかけて，使命感に燃えて作られた神聖なダムは，ここでは単にずっと以前からそこにある巨大な構造物に過ぎない。それどころか，爆破・破壊の危機にさらされるのである。ここでは，このように建設の苦闘にまつわる神話は登場しない。だが，雪深い深山に突如出現する巨大ダムという，特異な存在としての黒部をあらためて想起させるのである。

もう一つの現象は，2002年大晦日，NHKの紅白歌合戦において，中島みゆきが『地上の星』を黒部ダムで歌ったことである。『地上の星』は，NHKのドキュメンタリー番組『プロジェクトX』の主題歌であり，戦後の昭和を作り上げた無名の男たちに対する賛歌とも鎮魂歌ともとれるものである。黒部ダム建設もかつて『プロジェクトX』において取り上げられたテーマであり，その歌を歌う場所として黒部が選ばれたことは奇異ではない。奇異な点があるとすれば，1964年（昭和39年）ではなく，2002年であったことであり。しかしながら，『プロジェクトX』という番組は，戦争の記憶，被爆の記憶を語り部たちが語り続けるように，昭和，特に戦後の記憶を語る番組としての色彩を帯びている。この意味で，NHKは戦後の記憶としての黒部を，中島みゆきに語らせたのである。

以上のように，現代の黒部は，メディアを舞台に思い起こされ，昭和のノルタルジーとしてその神話が語られるのである。これは，近代性の象徴として観光のまなざしを照射された巨大ダム・黒部が，歴史的遺産へとその立場を移したことを示している。

4. アルペンルートを俯瞰して

観光ルートしての立山・黒部アルペンルートの全線開通は昭和46年である。その下地が黒部ダム建設のために設置された資材運搬ルートであることは言うまでもない。立山・黒部一帯の観光化にあたり，昭和35年に調査が行われる。この年は，まだ未完成ながら黒部ダムが湛水を開始した年である。実質的な立山・黒部アルペンルートの整備工事は，ダム完成後の昭和41年，立山トンネル（雄山の山体を貫き，室堂から裏側の大観峰へと至る）の掘削から始まる。立山トンネルは昭和44年貫通し，その後，大観峰から黒部ダムを結ぶロープウェイの建設が行われ，昭和46年に完成する。これによってルートの全体が開通するのである。

ところで，立山・黒部アルペンルートに隣接するもう一つの景勝地・黒部峡谷の観光化は，黒部鉄道株式会社によって次のように記されている。

「黒部峡谷の電源開発に伴い，その輸送手段として，電源開発が上流まで延びるとともに軌道を延長してきた黒部軌道は，昭和12年に現在の終点の欅平まで開通しましたが，当初は電力会社の専用鉄道として，建設用の資材や作業員輸送に重点が置かれていました。しかし，当地方は自然峡谷美を誇る秘境であり，探勝を希望する一般の人が絶えないため，やむを得ず生命の保証をしないことを前提に便乗の取り扱いをしておりました。その後，黒部峡谷の自然を求めるお客様の増加と地方の人々の強い要望から，昭和28年11月に地方鉄道法による営業の免許を受け，昭和46年7月には黒部峡谷鉄道として発足し，現在に至っています」[17]

こうして見ると，黒部峡谷の美しさは生命の保証がない乗り物に乗ってでも見に行く価値があることになる。一方，立山・黒部アルペンルートの観光の中心も，その美しい山岳風景である。その一つは，ブナの原生林や，湿原の高山植物，雷鳥やカモシカなどの高山に住む動物を間近に見たり，感じたりすることだろう。もう一つは，アルペンルート内には美女平屋上展望台，立山カルデラ展望台，松尾峠展望台など，多くの展望台があるが，これらの展望台から得られる，山並みのパノラマ的眺望だろう。夜空に広がる満点の星や朝焼けも，山岳のロマンをかきたてる眺めだろう。

昭和30年代半ばの日本人が，立山の山上に地獄，黒部の森に巨大な闇の禁忌を感じるのではなく，ロマンチックな美を見るようになっていたからこそ，電源開発から観光へ

という立山・黒部アルペンルートの展開がある。そこでこの節では，日本人の山岳に関するまなざしの変遷過程を論じる。

（1）日本の山岳と近代的ロマン主義

山は美しいというイメージは，西欧から日本へ移入された観念である。ヨーロッパの場合，山岳が「美しい風景」として捉えらるのは18世紀の半ば以降であるという。それ以前，18世紀前半までの〈山岳〉は，「悪魔の住処」であり，むしろ恐怖の対象となる醜いものであったという。たとえば，アルプスの最高峰モン・ブラン（白く輝く山）の名称は1742年に画家マルテルによって行われたものであり，もとはモン・モーティ（呪われた山）の名で呼ばれていた。しかし，18世紀後半，科学の発達が徐々に山岳の神秘のヴェールを剥がしていくとともに，文学でも山岳を賛美するものが現れてくる。このようにヨーロッパにおいて，ロマン主義的な美しい山岳観は18世紀の中葉に始まり，後半には徐々に広まっていくことになるのである。さらに，19世紀半ば，1850年代から60年代にはアルピニズムが本格化し，アルプス観光の大衆化につながっていったという（西田，2003：pp.102－103）。

日本におけるロマン主義的風景観の誕生においては，まず，1894（明治27）年に刊行された志賀重昂の『日本風景論』に注目する必要がある。水野によれば，志賀の『日本風景論』は「日清戦争中の日本におけるナショナリズムの昂揚期に，日本の国土愛を説き，愛国心を鼓舞する内容ではあるが，同時に『登山の気風を興作すべし』という項目を設けて，日本人の登山熱を強く煽った」ものであった（水野，1995：p.373）。また，ベルグは志賀の『日本風景論』の特色を「科学的基準に基づく風景の研究を創始して，自然感情に関する旧来の紋切型を公然と打破することを意図する」ものであり，「山岳に高い価値を与え（高度・雄々しさ），特に火山を重視するものであった（浄化の火，溶岩＝精液の噴出）」とまとめている（Berque，1986：p.277）。そして，ベルグは「『日本風景論』は事実上，風景自体の研究というよりは，むしろ西欧の諸々の価値に対する日本文化の反応の一形態であった。したがって著者は，風景の外在的ないし客観的側面の分析法を西欧の地理学から借りてはいるが，その内的ないし主観的側面に関しては，日本の文化遺産に依存していると言えよう」と論じている。しかしながら，志賀の『日本風景論』は西欧的な風景観の枠組みを持ち込んだものであり，それが近代登山という新たなスポーツと結びつけられていたという点で，従来の山岳観，山岳風景観とは一線を画するものであった。

なお志賀自らは登山の経験がない。日本における近代登山はむしろイギリス人ウォルター・ウエストンに推進されていった。志賀の『日本風景論』の2年後，明治29（1896）年にウエストンの著書『日本アルプス―登山と探検―』が刊行される。明治35（1902）年にこれを読んだ岡野金治郎と小島烏水がウエストンを訪ね，そこから親交が始まり，

日本山岳会が設立される（水野，1995：pp.375－379）。

だが，冠松二郎等，草創期の登山家たちはロマン主義者というよりも，むしろ近代的合理主義者であっただろう。たとえば，冠は『黒部渓谷』の序において，自身の近代科学的見方を述べている。それは，「科学的知識の浅薄な私は，動物，植物，気象，地質等には何等齎らすことのないのを残念に思っています。立山・黒部に於いては殊に地質学的研究は興味あるものでありますが，それは他にその人のあることと思い，私はただ概括的の風景を述べさせて貰ったのであります」（冠，1928：p.1）というものである。そして，それは風景においても，「明るい然し奥深い谷，それを私は黒部川に於いて初めて見た。それはクラシカルやロマンチックの美しさではなく，寧ろ自然の種々層を明らかに啓示しているナチュラリズム風貌を備えているものと思った」（冠，1928：p.3）と，ロマン主義的な幻想を排除している。実際，当時の登山は人跡未踏の地に分け入り，その地勢や地形を明らかにするとともに地名を与えていくような行為であった。この点では，スポーツ登山といいつつも，探検隊的な色彩を強く帯びていた。また，この時期はまだ多くの人夫や案内人を引き連れて入山している。こういった面から，当時の登山が経済的にも教養的にも恵まれた一部の特権階層の行為であったとともに，まだロマン主義的幻想が入り込む余地はなかったことがうかがわれる。

この後，昭和6（1931）年に国立公園法が制定され，国立公園制度が発足する。これは，探検的登山が一段落し，山岳美を鑑賞の対象として囲い込む余裕が生まれたこととも連動しているであろう。また，日本におけるロマン主義的山岳観はむしろ，この頃に誕生したとも言えるであろう。立山・黒部も，昭和9（1934）年に北アルプス一帯が国立公園に指定された時，上高地，乗鞍などとともに，その中に組み込まれた。

ただ，昭和初期の国立公園は，外国人観光客を念頭においたものであったことは指摘されており，日本人の大衆観光として山岳観光が定着するにはまだ間がある[18]。

（2）大衆山岳観光のまなざし

日本における大衆山岳観光の本格的な定着は，施設やアクセスルートなど山岳観光地の整備によっている。

山岳有料道路の開設は山岳観光地へのアクセスルートとして重要であるとともに，それ自身が山岳ドライブの場でもある。もっとも早期に開設された山岳有料道路は，昭和35（1960）年開設の鳥取県大山の大山環状有料道路であろう。また，富士山の富士スバルラインは昭和39（1964）年の開通である。さらに，山岳観光地そのものの整備においては，ロープウェイ等の施設は欠かすことができない。日本アルプスに属する山岳では，駒ヶ岳ロープウェイが昭和42（1967）年に，新穂高ロープウェイが昭和45（1970）年に開設されている[19]。

以上のように，1960年代は大衆山岳観光を可能にするための施設が整備され，稼働し

始めた時期なのである。山岳観光が大衆化されていく背景として，当時の高度経済成長に支えられた余暇活動への欲求や，マイカーの普及をあげることができる。実際，昭和35（1960）年はレジャーという言葉が誕生し，レジャーブームが起こった年と記録されており，翌年の36年にはレジャーブームの一環としてスキーや登山などの山岳スポーツに関する関心が高まり，一年間のスキー客数は100万人，登山客数は224万人と記録されている（下川，2001：p.303, p.313)。

黒部の観光化に関する調査が開始されるのは昭和35（1960）年であり，ちょうどこの全国的な山岳観光の大衆化と軌を一にしているのである。また，昭和46（1971）年の立山・黒部アルペンルートの全通後も，各地で山岳観光地の整備が続いている。その例として，乗鞍スカイライン(昭和48年開通)，鳥海ブルーライン(昭和48年開通)，白山スーパー林道（昭和52年開通）などをあげることができる。

ところで，山岳観光の大衆化は，大量の観光客を受け入れることにより，その最も重要な資源である山岳の環境を急激に壊していくものでもある。これに対して，最も早く対策を取ったのは上高地であろう。上高地はまだ各地で山岳有料道路の建設が続いている最中の昭和44（1969）年に，車の締め出しを決めている（下川，2001：p.379)。また，大山も昭和43（1968）年には，地元の人々が「大山を美しくする会」を発足させ，ゴミ問題の解決に取り組み始めている。さらに，後発の乗鞍スカイラインや鳥海ブルーラインでは，自然保護を求めての反対運動により，建設が難航した経緯がある。山岳観光の大衆化は，排気ガス，ゴミ問題など付随する問題と，自然保護との間で揺れ動きながら進展してきたのである。

現在の立山・黒部はマイカー規制が行われているばかりでなく，ルート上の移動機関に低公害バスやトロリーバスが導入されている。しかしながら，低公害バスやトロリーバスの導入は平成に入ってからである。平成すなわち1990年代はエコロジーという概念が定着した時期であり，近年ではエコツーリズムという言葉も普及しつつある。現在の山岳観光地は，ただアクセスしにくい高層の山岳へ行き，その景色を眺められれば良いというのではない。環境に対する配慮が行き届き，自然環境がよく保護されている場所でなければ，山岳観光地としての価値は低下するのである。エコロジーは自然に神聖性，不可侵性を付加する。この意味で，山の自然に対する観光客のまなざしも，いくばくかの変容を遂げつつある。たとえば，単にアルペンルートを通過するのではなく，立山山上をくまなく歩き回り絶滅の縁に立たされた雷鳥の姿を求める人のまなざしは，こういった変容を反映しているのかもしれない。

最後に，日本における，大衆化されたロマン主義的まなざしが，どのようなものであったかに触れておく。

1960年代にはすでに，山岳に対するロマン主義的まなざしが成立しており，そのまなざしの要請に従い山岳観光地が整備され，山岳がレジャー，観光の場として定着した。

その結果，立山・黒部の場合は年間100万の客を集める観光地に成長する。『雪山賛歌』や『山男の歌』などの山の歌が，大学の山岳部歌等から一般的に人に口ずさまれるメロディになるのもこの頃だろう。こればかりではなく『四季の歌』や『夏の思い出』のような自然の美しさを歌う歌の流布もこの頃だろう。また，石坂洋次郎の小説『青い山脈』の映画化も，山に対するロマン主義的まなざしの大衆化に貢献するものであっただろう。ちなみに，『青い山脈』は1949年，1957年，1963年，1975年，1988年の5回映画化が行われている。日本におけるロマン主義的まなざしは，こういった歌の歌詞や『青い山脈』のイメージとして表現されてきたものであろう。

しかし，その後，山岳に向けられるロマン主義的まなざしも変容し始める。ゆっくりと山を歩き単純に風景や高山植物などの山岳の美しさを賞揚するのではなく，スキー，ドライブを楽しみ恋愛を謳歌するにふさわしい，美しいシチエーションとして山のロマンが語られるようになる。それは端的には，1987年の原田知世主演の映画『私をスキーに連れてって』に見られるようなゲレンデの恋人たちのイメージとして表現されるものであろう。これは山岳をアクティブなレジャーの場にしていくものであり，散策が主体になる日本アルプスのような高層から若い層を遠ざけるまなざしであったかもしれない。現在ではさらに，エコロジカルなまなざしが，山岳に対し，消えゆく貴重な自然あるいは手つかずの自然が保持された神聖な場という見方を加えているであろう。

おわりに

観光研修において2003年9月15日～17日の間に立山・黒部アルペンルートを訪れたことが本稿を書くきっかけとなった。もう少し具体的に言うと，学生たちのレポート作成にあたり，「立山山上には高齢者が多かった」と印象を述べた者が多かった。その時点で筆者は，これに対する納得のいく説明を思いつかなかった（立山に登ったのは16日であるが，筆者たちが研修に出かけた15日は祝日である。このため，既に夏休みが終わった9月の平日だからという説明では説得力不足である）。そこで，学生と同じ立場でレポートを書いてみることにしたのである。

ここであらためて，学生たちの疑問に対する結論を出しておきたい。

すなわち，高齢者，60歳代，70歳代は，現代日本において最も強くロマン主義的な山岳観の影響を受けた世代である。庶民としての彼らのロマン主義は伝統的な名所観や，山岳信仰の残滓を引きずる混淆的なものではあるだろう。それが「山岳の自然＝美しいもの，ロマンチックなもの」と括られ，観光の指向性に影響を与えるのは，彼らの生活史とかかわっている。国立公園はちょうど彼らが生まれた頃にが成立したものである。また，登山は，まだ大学の山岳部に代表されるような知的エリート層のスポーツであった。国立公園の西欧的，近代的な風景美や，スポーツとしての登山は，憧れをかきたて

るものとして，子ども期，少年期の彼らに影響を与えてきただろう。戦後の『青い山脈』の映画化は，ちょうど彼らの青春期の出来事であった。こういったメディアは，彼らの山に対するロマンチックなイメージの形成に影響を与えただろう。彼らは，実際には戦争と，その直後の時代は観光やレジャーから遠ざかることになった。だが，こういった山に対する観光のまなざしの涵養が，高度経済成長期に，彼を山でレジャーを楽しむ第一世代，マイカーによる家族旅行の第一世代として，昭和30年代，40年代に国立公園＝山岳観光地へ出かけさせるのである。

また，現代に至ってなお，山岳観光地に高齢者が多いのは，彼らの生活史の中で培われてきた上記のような「観光のまなざし」に依っているのである。豊かさと時間の余裕を得た彼らは，国立公園では飽きたらず，「百名山」さえ，そのまなざしによって観光地化していく。つまり，昨今の百名山ブームもまた，彼らのまなざしによって導かれたものなのである。

このように見ていくと，エコロジカルな山岳観が，なんらかの契機によって新たなまなざしとして若い層の間に浸透していくならば，若い層を山岳観光地に呼び戻すことも可能かもしれない。

いずれにしても，学生たちのおかげで，筆者は刺激的な知の旅を楽しむことができた。学生たちに感謝したい。

註

1）『観光のまなざし』（アーリ，1995）参照。

2）登山者向けのガイドブックに掲載された山小屋の紹介として，たとえば天狗平山荘は「1934年（昭和9年），芦峅寺の佐伯間佐衛門氏が現在地に創設したのが始まり。室堂平・天狗平周辺では古い山小屋の一つである。現在の小屋主は昭和20年代初頭から父君の跡を継いだ守氏，そして氏の長男である賢輔氏も山荘に入り，今では実質的な経営者として活躍している」，内蔵助山荘は「芦峅寺の名ガイドのひとりであり，クマ撃ちの名手としても知られた佐伯利雄氏が，1961（昭和36）年，内蔵助カール上部に建てたのが最初」と記述されている。剱御前小舎，剱山荘，真砂沢ロッジ等，多くが芦峅の佐伯姓，あるいは志鷹姓の創設・経営となっている（鈴木，2000：pp.155－165）。志鷹姓の来歴は不明であるが，こういったことからも芦峅寺と立山との関係の深さがうかがわれる。

3）立山の名はすでに『万葉集』に現れる。この時期の立山は「うしはく神」であり，「個別化され特定化された神」を意味していなかった。また，開山縁起では奈良時代・大宝元(701)年に「佐伯有若なるものがあり，有若またはその子の有頼が，矢疵を受けて山頂へ逃げる熊を追いかけて登ったところ，岩窟に逃れた熊がやがて金色にかがやく阿弥陀の姿で現れたので，有若または有頼が，その霊異に打たれて仏道に入り，慈興上人と仰がれるようになった」とされている。しかし，高瀬は有若が平安初期・延喜の頃（900年前後）に実在した人物であることから，立山の仏教化を平安初期と推定している。また，その後，『本朝法華験記』(1040)，『今昔物語』(1106－1108）などに立山地獄を主題とした仏教説話が

現れていることから，立山地獄信仰の形が整えられたと見られている（高瀬，1977：pp.181－185）。

4）「この熊王権現より暫く登れば鷲の岩屋あり，その上方に材木坂がある。立山が女人禁制のためにここに女人堂を建立し，結界の妙法所にせんと材木を積み置いたところ，若狭小浜の尼僧止宇呂なる者が女子二人を随えて登山し，『吾は尼，何ぞ女人禁制の要ありや』とて，敢えてこの材木を打ちまたいで登ったので，一夜に材木化して石となる。この故に材木坂といい，現今なお火山現象の角材石が露出している。材木坂を上りきれば美女平に出る。美女杉があることからきた名である。止宇呂の隋身の娘が化して杉となりし木という。さらに一里ばかり行けば，高さ十五間の断罪坂があり，鍋冠杉・冠ろ杉・しかりばりの穴がある。止宇呂隋身の童女がこの急坂を罪の深さを断ずる所と聞いて，打ち戦き能く登らないので，尼が大声で叱りつけたので童女は益々に驚き悲しみ，思わず小水を洩らしたところが，山神の怒りをかい，山道の真中に深い穴があき，叱られてばかりいたので「しかりばり」という。そしてついに童女が杉の木に化したのが冠ろ杉である」（佐伯，1977：p.266）

5）ホームページ［立山・黒部アルペンルートオフィシャルガイド］による。
(http://www.alpen－route.com)

6）ホームページ，富山のガイドブック【黒部立山】による。
(http://www.gct.co.jp)

7）「越中の男子16歳にしてこの山上に参詣し，朱塗りの杯に唇をつけて御神酒をいただかない者は一人前に非ずとされ，もし中途上山できない者は前世悪行の報いなりとされ，帰郷してから一生の間他人の爪弾きにされたことは昭和の初年までの現実であった」（佐伯，1977：p.274）

8）渡辺は「江戸期の山旅と自然」において「知識階級の登山」について触れている（渡辺，1995：p.252）。

9）津村淙庵『譚海』（寛政７年），堀麦水『三州奇談』（宝暦13年），野崎雅明『肯構泉達録』（文化12年）等に黒部奥山の怪異譚が収録されている（広瀬，1977：pp.459－460）。

10）広瀬は「黒部奥山と剱岳－その入山禁忌の信仰をめぐって－」において，江戸・天保時代に企画された黒部奥山の伐採事業の挫折の経緯を詳細に述べている（広瀬，1977：pp.461－466）。

11）「近代登山の開幕を告げたのは1854年（安政元年），イギリスの貴族，A・ウィルスによるアルプスのウェッターホルン（3704m）の初登頂だと言われている。その３年後にはイギリスにはじめてアルパイン・クラブが設立され，65年にはE・ウインパーがマッターホルンの初登頂に成功した」（渡辺，1995：p.246）

日本における外国人の登山が主としてイギリス人であるのは，近代登山がイギリスから始まったこととの関連で理解できるだろう。

12）冠松二郎は『黒部渓谷』において，これらの歩道について詳細に記述している（冠,1930：pp.42－51）。

13）木本は外国人労働者の徴用については詳しく記述していない。

14）黒部峡谷鉄道会社ホームページによる（http://www.kurotetsu.co.jp）。

15）『プロジェクトX－挑戦者たち－』「厳冬黒四ダムに挑む～断崖絶壁の輸送作戦～」，2000年６月20日放映，NHK。

16) 映画『ホワイトアウト』公式ホームページによる（http://whiteout－movie.com）。

17) 黒部峡谷鉄道株式会社ホームページによる（http://www.kurotetsu.co.jp）。

18)「国粋主義と帝国主義を国立公園誕生の社会的要因とすれば，国際観光と地域振興は地域的要因であった。外客誘致による外貨獲得，内外の観光客誘致による地域振興への期待が国立公園には強くかけられていた。国立公園制度を生む議論のなかで，国立公園は外客誘致つまり外国人観光客誘致に資するところが大きいと論じられていた」（西田，2003：p.106）。

19) 各施設の開設年次はインターネット検索によった。

参考文献

アーリ・ジョン，1995『観光のまなざし』加太宏邦訳，法政大学出版局（John Urry: THE TOURIST GAZE－Leisure and Travel in Contemporary Societies，1990）

ウエストン・ウォルター，1995『日本アルプス—登山と探検—』平凡社（Walter Weston: MAUNTAINEERING AND EXPLORATION IN JAPANESE ALPS，1896，TAISHUKAN PUBLISHING COMPANY，1975）

オギュスタン・ベルグ，1992『風土の日本—自然と文化の通態—』篠田勝英訳，ちくま学芸文庫（Augustin Berque: LE SAVAGE ET L'ARTIFICE－LES JAPONAIS DEVANT LA NATURE，1986，Gallimard）

冠松二郎，1928『黒部渓谷』アルス（1975年復刻，日本山岳会企画・編集，大修館書店）

冠松二郎，1979『渓』中央公論社

木本正次，1992『黒部の太陽』信濃毎日新聞社

佐伯幸長，1977「立山をめぐる伝書説話」『白山・立山と北陸修験道』高瀬重雄編，名著出版

下川耿史他編，2001『昭和・平成家庭史年表』（増補版），河出書房新社

鈴木昇己他，2000『立山・剱岳を歩く』（第二版），山と渓谷社

住谷雄幸，1995『江戸百名山図譜』小学館

高瀬重雄編，1977a『白山・立山と北陸修験道』名著出版

高瀬重雄，1977b「立山信仰の成立と展開」『白山・立山と北陸修験道』高瀬重雄編，名著出版

田畑真一，2001，『知られざるW・ウエストン』信濃毎日新聞社

広瀬誠，1977a「立山開山の縁起と伝承」『白山・立山と北陸修験道』高瀬重雄編，名著出版

広瀬誠，1977b「黒部奥山と剱岳」『白山・立山と北陸修験道』高瀬重雄編，名著出版

西田正憲，2003「観光のまなざし」『アジア遊学』第51号，勉誠出版

水野勉，1995「解説－日本近代登山の礎となった山の古典」『日本アルプス』W・ウエストン，平凡社

渡辺善次郎，1995「江戸期の山旅と自然」『江戸百名山図譜』住谷雄幸，小学館